

自 殺 未 遂

花 田 鐵 太 郎

ひととせ、非常に不景氣な冬がございました。氷つた様な雲はのべつに玄海の空を低く走つて、海は荒れ通しに荒れてゐました。この小さな漁村は全く何ものかに呪はれてでもゐる様に、固唾を呑んで大地にこびりついてゐました。

漁士達の赤ら顔には、生の苦悶がありありと刻まれてゐました。そしてあの大海から惠まれてゐた明るさではなくて、みぢめなほど陰氣くさい人相を造つてゐました。大抵はその日の食事にも困ると云ふほどの有様でした。「うぬ、少つとお我慢しやがれ、」などと、いたいけない子供の食慾を怨嗟する、荒々しい言葉が、ごうかすると隣り合つて聞かれることは珍らしいことではありませんでした。しかし鍋釜まで質に入れても、食ふ丈はどうかして食はねばなりません。食ふより外に生きゆく道はありませんでした。そして漁士達の心は食へ無いが爲に、日にまし荒んでゆくばかりでした。

こんな恐ろしい時、この村に入りこんで来た一人の行商人がございました。その頃妻の父はこの村で唯一軒の旅籠稼業を致して居りました。でその行商人は妻のところにお留りになつたのでした。

まだお若い男の方でございましたが、こんな出稼人には珍らしく無口なお方でございました。そして恁んな事をなさるには勿體ない位の美しく澄んだ眼を持つてお出でました。妻は自然きつと相當の身分のお方に違ひないと思つてゐました。

その方の持物と云つては、小さな竹行李を一個大判の紺布呂敷に包んだのがあるばかりでした。そしてそれが多分その全財産だつたのかも知れません。けれ共その中に何があるのかしらなど云ふ、好奇心は妾にはとんと持てませんでした。よく行商人が妾達まで誤魔化して行つたことのある、まがひの椿油や粗末な箱に三つか詰つた安い石鹸などが、ぐつさりあるのだらうと獨りできめて了つてゐました。

その方は妾のところに泊るなり、近在に行商に出掛けるでも無く、ただのらくらしてばかりお出で、した。妾は怠ける嫌なお方だと思ひながら、あの濕のある視線には云ひ知れぬ可憐しさを覺れてゐました。そしてあのしまつた口からしんみりとした話を聞いて見たいと、うら恥かしくも思つたりしました。けれ共あの方はそんな餘計な話はおろか、必要な口も成る丈利かずに澄ますと云ふ風でした。

御飯を召し上つてゐる時でも、何かひごくかけはなれた遠方のことを考へてゐらつしやる様な面持でした。始の中はお給仕に出てゐる間のこの遣る瀬ない沈黙を、ほんどうに辛いと思ひました。けれ共、馴れてみると却つて樂に耐ゆることが出来ました。そして妾も又勝手に好きな事を考へ廻してゐました。けれ共唯一度例外がございましたの。夕方私がお膳を運んで参りますと、あの方は縁側の障子を開けてうす暗い淋しい戸外を見詰めていらつしやいました。すぐ、不規則な家並の上には眞暗な西の空が、どこどころ夕焼けながら控れてゐました。珍らしく風の風いだ夕暮でした。妾はあの方の便りない姿を見て、お世辭でなく心からかう申しました。

「ほんどうに詰りませんな！こんなに不景氣なもんだで！……」
するとあの方は七つと妾を見据へてお出で、した。

「僕はこれが好きです。」とおつちやいました。それは全くこの村の陰鬱が気に入つたと云ふ様な調子でした。そして不思議にも、その後妾自身「妾も好きなのかしら」と思はされたのでした。

たしか一週間ほどは恁んな工合にして過ぎて了ひました。妾達はたまにあの方が外出なさるのを見たつきり別に變つた事は起りませんでした。

いくら何でも父達はもう我慢しきれなくなつたと見れて、あの方の事について色々私達に尋ねたり、何かひそひそと相談し合つてゐました。

あの方の姓は吉塚さんとおつしやいました。私達はごくごく、いのお客様を除いては、殆んどお姓を呼ぶことはありませんでしたが、この方丈は二三日するともうお姓を呼んでゐました。けれ共これはほんの妾達の間丈の事で、あの方の前へ出ると誰も氣が引けて吉塚さんなどと呼ぶことはありませんでした。

「吉塚さん、これはあるらしいのかい？」

ある日母は指でいやしい輪を造つて小聲で妾達に呶きました。

「およしさんがよくお出なさるから、およしさんなら分りませう。」

「だつて、妾知りません！」

妾は何だか侮辱された様な氣がして、膨れて了ひました。下女のおきんさんはするさうな、勝ち誇つた様な笑ひ方をしました。多分妾とあの方との間に、何かおかしな關係でもあると思つてゐるらしかつたのでした。兎に角、明日あたり父がきり込んで見ると云ふことに、話はきまつた様でした。そしてもし事によると、お斷りしなければならぬと云ふ意味の事を、父は獨言ともなく申しました。妾は不憫な氣はしながらも、もし

さう云ふことになつても、父達の仕打を殘酷だなどと思ふことは出来ませんでした。何故なら漁村の不景氣は、この村に住む以上は、こんな稼業にも必然暗い陰影を投げてゐたのですもの。

その晩は思ひきり寒い晩でした。雨雪がからからと軒を打つて過ぎるのも聞きました。

からりとした凸凹道の上には、郵便局の軒燈が覺束ない光を一所投げてゐるばかりで、灯影らしいものはありませんでした。今夜は又格別に早く何處の家でも火を消して寝たものと思はれました。

妾達も寝ようと思ひまして、妾は吉塚さんの床をのべる爲に二階の部屋へと上つて参りました。お部屋はひつそりとしてあの方の姿は見られませんでした。始妾はは、か、かと思つてゐましたが、何時までたつてもお見ねにはなりません。いつもならば別に不審にも思ひはしませんのですが、晝の間女中にさんざ嫌味云はれたり何かしました事だし、又こんな晩だもの別にお出掛なさるところもあるまいと思ひましたので、變つた事ではあるまいとは思ひながら、妾は獨りで黙つてゐる譯にはまゐりませんでした。

それから一時間ほど後の妾の家は、全く養を返る様な騒動でした。でつきり逃走されたものときめられて、妾が氣が利かぬと母に怒鳴られて泣き出す。父と母といさかいが始まる。巡查さんがお出でになる。部屋の申が調べられる。

あの方のお部屋の中には、床の間のところに布呂敷に包んだ例の行李と、その傍に股引に袴、古い角帯などが、きちんと列べてありました。そして貧しいながらある嚴肅な氣分が籠つてゐるのを、誰にも感じさせた様でした。行李の中には、妾の想像通り、石鹼や、白粉や香水や齒磨粉などが半分ばかり詰つてゐる外、懷中日記と二通の遺書とが見出されました。お人のよい巡查さんは丹念に細々と書き取つてゐらつたのです。

が、此時その日記帳をめぐつて、暫くは仔細ありげに讀み耽つてゐらつしやいました。

「は、あ！自殺者だ。」

「何ッ！」

妾達は引きつけられる様にその手帳をのぞき込みました。それは恰度今日のところで、如何にも謹直な文字が鉛筆で書き連ねてございました。

十二月×日、金

ちいちゃん、私の最後の日が来た。今宵私はあの燈籠道の巖頭からこの「謎の肉体」を投げようとするのだ。しかし何でも無い事なのだ。お前は安らかな眠のうちにあれよ。夢にもあのうしほの音を聞いてはいけない。

ちいちゃん、お前は私の自殺を聞いたら狂ふばかりに驚くかも知れない。けれ共私は私の幸福を追ふのだ。死より外に私の幸福は無いのだ。

ちいちゃん、私に今せめて獨語などと云はせてお呉れ、お前に愛されてゐた私も決してほんとうに幸福では無かつたのだ。あゝ如何に私の血縁者によつて虐げられてゐたよ。あゝ如何にお前の愛によつて呪はれてゐたよ。しかし誰が如何に私を虐げてゐたにせよ、なまなかお前の愛を知らなかつたら、この「謎の肉体」が解ける日まで、私は生き残つてゐたであらう。そして鐵面皮に破廉恥に生きられるだけ生きのびたであらう。それも私達の様なおそろしい遺傳をうけて生れた人間としては當然のことであり、また幸福でないとも限らぬ。けれ共お前の愛に呪はれた私は、私自身それを幸福だとは考へ得ない。い

や私自身には生くると云ふことが苦痛なのだ。そしてこの儘お前の愛をうけることは尙更の事だ。だから私はお前の愛の呪から逃れるために自殺をする。それが一番幸福だと思つてゐる。

ちいちゃん、私はもともとお前なんかの愛をうける資格は無かつたのだ。お前にはほんどうに濟まない。許してお呉れ。あゝせめてお前を處女で残すのだつたら、私は死ぬにもこんな思はずまいに。しかし何事も後の祭りだ。たとへ、遅かれ、私が自殺を決心したのは、ちいちゃんお前の爲にも幸福なのだ。自殺は二人の爲に幸福なるべき筈だ。さあ、私は今からこつそり忍び出でて、あの斷崖の絶頂に立たう。その下には眞黒な深淵が泡をふいて待つてゐる筈だ。

ちいちゃん、私はこゝにお前の一生の幸福を祈る。恐らく私があの巖頭に立つた時も、肉体が九天直下する切那もこの事をばかり祈つてゐるだらう。過去よ！すべてが夢であれ。ちいちゃんよ！私はお前にとつて「豊純な肉体」の幻影であれ。そして海よ！！私の死は永遠の謎として汝の威大さのうちに秘め去れよ。

妻はあの方の澄み切つた眼を思ひ浮べました。更にあの大大理石の様な肌をも。そしてその瞬間はつきりしない、しかし可成り氣持の悪い悪寒におそはれてゐました。

更に私達はあの方が始めてこの村に入り込んだ日の日記を読んで見ました。

やつと目的地に着いた。成るほどいゝところだ。吹くから風からしてすばらしい。うつかりすると飛ばされさうだ、それにまるで親友でゝもあるかの様に巨大な手で、肩をぐんぐん揺ぶつて呉れる。海を見よ、海を、悪魔の様な濤は私の肉体を一呑みにせんと狂ひ立つてゐるのでは無いか。あゝあのうたうつ度

見ゆる、青くすき透つた腹よ。それは私の持つて生れた謎を、このまゝ永遠に葬り去つて呉れるに違ひない。

あゝ、苦しみ、呪ひ、憎しみ、虐げ、すべての醜いものから私が解放される日も近づいた。ちいちゃん、お前の崇りの浄められる日も近いづいたのだよ。私はうれしい。あゝ私はうれしい。

これであの方が行商しながら自殺の爲にこの村までいらつしたと云ふ事は、何等疑をいれる餘地もありませんでした。

妾は、場所もあらうに態々邊鄙なこの村が、自殺場として選ばれたとは、今年の冬はよく／＼呪はれたものだと思ひました。

遺書の一通は妾の父に宛てたもので、色々災難をかけて濟まないと云ふ事から、例の行李の中の品物と、衣類などで、どうにか勘定を濟まして呉れと云ふ様な事が、丁寧な文字と文章で書いてありました。無論それらを見積つて見ると十圓やそこらの宿泊料は充分に出るのは明かでした。

も一通の方は表皮に「ちよ子様」と書いてあるのでした。何處のお方だか分りませんでした。けれ共ちよ子様とは多分日記の中のちいちゃんてお方だらうと云ふ事は容易に想像されました。自分が自殺すれば自然分つて来るだらうと云ふお積りであつたのかも知れません。それでも緘封がしてありましたので、私達には中を見る譯には参りませんでした。

父はひどく上氣してゐる様でした。そして何よりも第一に、恁んな事があつてはこの家の信用にかゝはると云ふ風に考へてゐた様です。それですぐ様近所の男衆を四五人叩き起して、搜索に出かける事に致しました。

無論巡査さんもサーベルをガチャガチャ鳴らしながら、急いで外へ出ていらつしやいました。

その晩は外にお客もありませんので、父達に出られると後は女ばかり三人でした。風がどきどきを作つて過ぐる度に、ひとみはガタゴトと氣味悪い音をたて、顛へるのでした。すき間洩る寒さは建具の少いガランとした部屋（部）の空氣を容赦もなく、冷しきつて了ふのでした。妾達は居眠りもせず、ぼんやりして夜の明けるのを待つ外はありませんでした。

妾は、提灯を毛布にくるんで、風と暗との中を小走りする父達の姿を頭の中に描いてみました。するとついで、切つて落しの巖頭に立つて、あの長い皆に涙を溜めたあの方の姿があり／＼と想像されました。そしてふと我にかへると、妾は全身に水を浴せかけられた様に竦みました。庭先にあの方が消然と立つてこちらを見てゐる様な氣がしたからです。けれ共それは素壁にうつつた柱の影でした。と、時計が重くるしく二つ打ちました。母も下女も怯かされた様に氣味悪く眼を据わて了ひました。小猫はごろ／＼鼾をかきながら妾の膝の上に眠つてゐました。それは人間に、どつては、不安な凄^{（）}い一夜でした。それとも明り窓がぼうつとし出した頃、父達は土の様な顔をして歸つて來ました。そしてその中にあの方の悄れた姿が見えました。私ははつと息をついたのでした。けれ共母達の様にあゝ好かつたなごゝは思ひませんでした。あの方は何となくきまりの悪さうに、俯いてお出で、した。妾は始めて思ひきつて、そして別に恥らひもせず、その横顔を見詰めました。あの長い皆は涙で濡んでゐました。そしてその絹糸の様な眉毛は、やさしい男らしさをうつすらと描いてゐました。

この時怪しく「謎の肉体」と云ふ文字が頭に泛びました。そして、いつそ死んでお了ひになつた方が矢張り幸

福だつたらうにと、變な事を考へました。

父達は二手に分れて探したのださうです。そしてお巡りさんの群が燈籠道をお登りになると、あの方がまだ其處に蹲つてお出でなさるところを、取り抑へたのでした。「君はどうしたと云ふんだー」といきなり巡査さんがお聲をかけなさると、「どうぞ私を救つて下さい」と叫びながらその手から逃れやうと、腕きなされたと云ふ事です。

「救うんだ！助けてやるんだ！」

と巡査さんは優しく云ひながら、油断がならぬので、搦めてお了ひになつたのでした。それから久しいこと其處で父達を待ち合はせてから、みんなで引きかへしたのでした。

「飛び込むなら、さつさと飛び込みやがれば始末がいのさ！」

搜索から歸つて來た漁士の一人は敷居に腰掛けてゐて、何か鬱憤を吐き出す様に、長火鉢の前にゐた母に呟いてゐました、妾もそれが出來ればその上は無かつたらうと思ひました。

あの方は一口も口をおきゝになりませんでした。けれ共父は干潮だつたので滿潮を待つてお出でになつたのだらうと申してゐました。そして父はそれを大層幸な事だつたと考へてゐる様でした。勿論私はさうは思ひませんでした。

燈籠道の崖上と申しますと、この村の岬の先端を云ふのでございます。滿潮ですと、玄海の荒浪がまつかうからぶつゝかつて來るのですが、于潮となりますと、底の砂地が露はれるのです。何しろ何丈と云ふ斷崖にはなつてゐても、これでは或は死なゝいこともあるかも知れません。で全く父の申した通り滿潮を待つてゐる

らつしたのに違ひありませんでした。

じきに夜は明け放れました。

「飛んだ人騒がせをしやがる！」

搜索に行つた男衆はぶつ／＼云ひ乍ら、それ／＼歸つてゆきました。私はこの人達の後姿を見送りながら、この人達の方が父や巡査さんよりずっと同情心に富んだ人の様に、何故か思はれてなりませんでした。

巡査さんは仲々宿帳の記載などを信じないで、ぐん／＼とあの方に問い詰めてお出でゝしたが、たう／＼その偽だつたことが分りました。無論そんな事には妾達は餘り驚きませんでした。

吉塚さんとおつしやるのも假のお姓でした。けれ共妾には吉塚さんで澤山です。妾は好意のつもりで吉塚さんと云ふお方として記憶して居ります。

お國は確か中國でした。原籍地などいろ／＼答へた後で吉塚さんは、

「決して輕はずみは致しませんから、故郷に照會なさるのはお許しなさつて下さい。それに無駄事かも知れませんから。」

とおつしやつたさうです。けれ共巡査さんは職務上止むを得ないとおつしやつて、電報で照會なさつたのでした。それから四日の間、あの方の叔父さんとおつしやる方がお迎ひにいらつしやるまで、始んど四人も同様な監視があの方の身邊に加へられてゐました。ほんとうにお氣の毒な氣が致しましたけれ共、妾があの方の部屋に出入するのを母は留めてゐましたので、お慰めする機會もありませんでした。

あの方の叔父さんと云ふのは、色の淺黒い頭髪を分けたお方でした。何と云ふへまをするんだと云ふ様な冷

淡な眼附をして、その日の夕方あの方を連れておたちになりました。その時あの方は矢張り行商人の扮装をなさつて、眼には二ばい涙を溜めてお出でました。

「まあ冷淡な叔父さん！」

妻は涙ぐましい様な氣持の中に、憎しみの念のもゆるのを感じました。そしてそれは、穴がち叔父さんとおつしやるあの四十男に對してばかりではありませんでした。

その後妻はしばらくはあの方のことが思ひ出されてなりませんでした。そしてその都度「救うんだ！助けてやるんだ！」とおつしやつた巡査さんの言葉に異様に反抗心を唆られるのでした。

あの方の「謎の肉體」は解けず、澄みませんでしたでしょうか。もし解けたとすればどんな風に解けたでしょうか。妻は今でもよく恚んな事を考へるのでございます。そしてすべてがあの方の杞憂であつたのならばいと思ふのでございます。

——一九・八・一〇——

地獄廻り

佐々木 高 遠

彼等が立つて來たB町から數哩、海岸に沿うて走つた汽車は今田舎めいた小さな一驛に停つた。彼は急に立ち上つて手提鞆を此所の驛で打つべく頼まれた電報とを持ち乍ら、一行に世話になつた禮やら何やら述べてプラツトフォームに下りた。此のK驛は田舎ながら海岸の温泉場だけに相當の客があつた。ブリツチがな